

鳥居龍藏と信濃調査（下）

——日本民族起源論との関連を中心に——

田 畑 久 夫

一 問題の所在

二 鳥居の「固有日本人」説（以上本誌第四号）

三 信濃調査の意義とその成果

（一）信濃調査に至るまで

（二）日程と調査内容

（三）信濃調査の成果（以上本誌第六号）

四 日本民族起源論のその後の展開

（一）「固有日本人」説に関連した日本民族起源論

（二）『有史以前』にみられる「固有日本人」説

（三）「固有日本人」説後の展開

（四）小結——結びに代えて——（以上本号）

四 日本民族起源論のその後の展開

前稿（本誌第六号、二〇〇二年、四一—二八ページ）では、鳥居龍藏が実施した大正九（一九二〇）年の信濃調査をとりあげ、分析・検討を行なった。かかる理由は、鳥居龍藏が強力に提唱する、日本人の祖先の中核となったと推定している、いわゆる「固有日本人」説の検証を、信濃において試みたからであった。勿論、前稿において言及したように、鳥居龍藏の信濃調査の直接の動機は、諏訪および上伊那両郡の郡史の中の先史と原史時代の執筆依頼を地元それぞれからの教育会から受けたためであった。

鳥居龍藏は、信濃調査以前の明治三二（一八九九）年に恩師である東京帝国大学理科大学教授坪井正五郎の代理として、北千島列島古守島において発見された竪穴住居跡の

調査を行なった。そしてその結果、かかる竪穴住居跡は恩師坪井正五郎が大変期待していたように、アイヌに伝わるコロボツクルによって建造されたものとは認め難く、むしろ論敵である東京大学医科大学教授小金井良精が強固に唱えるアイヌの手によって建てられたものであるという事実が判明した。

かような経緯を経て、鳥居龍藏は、日本人の祖先つまり石器時代人が鳥居自身が主張する「固有日本人」にちがいないという学説に到達したのである。信濃調査は、鳥居龍藏にとっては持説を補強するうえからも重要なフィールドサーヴェイであった。すなわち鳥居龍藏は、郷土史の執筆依頼のためのフィールドサーヴェイを精力的に実施する中で、「固有日本人」説の具体的な考古史料の収集に努めたのであった。本稿では、以上述べた過程で形成された鳥居龍藏の「固有日本人」説の展開に焦点をあてて論をすすめていくが、とりわけその後の日本民族起源論との関連について、検討していくことにする。ただし、本稿作成の主旨は鳥居龍藏の唱えた「固有日本人」説の検証であるため、その後の日本民族起源論の展開に関しては鳥居龍藏に関連したもの限定しておきたい。^①

(二) 「固有日本人」説に関連した日本民族起源論

前々稿(本誌第四号、二〇〇〇年、一―二一ページ)で論じたように、鳥居龍藏が強く提唱する日本人の祖先が「固有日本人」であるとする見解は、当時盛んに戦わされていた坪井正五郎と小金井良精の両名を中心とするアイヌ⇨コロボツクル論争を契機として発表された。アイヌ⇨コロボツクル論争は非常に公私ともに大恩のある坪井正五郎がコロボツクル説を主張する中心的な研究者であるということから、かかる説を完全に否定することができなかった。それ故、鳥居龍藏の提唱はある面において、アイヌおよびコロボツクル両説の折衷案であるという側面も有していた。鳥居龍藏が「固有日本人」説を主張しだした大正時代の中頃までには、日本人の祖先⇨石器時代人^②に関しては以下の三説が唱えられていた。^③

第一の学説は、日本石器時代人をアイヌに伝わる伝説上の人物コロボツクルであるとするものである。コロボツクルに関しては、万治三(一六六〇)年二月に鳥羽を出帆し、長州沖で暴風に遭遇し、洋上を七ヶ月間漂流した後千島列島に漂着、翌寛文元(一六六一)年九月に帰国した伊勢国

松坂の船の漂流記が初見であるとされる。この漂流記は『勢州船北海漂流記』と称されるもので、その中に「蝦夷人（アイヌのこと―筆者註）物語申候は小人島より蝦夷へ度々土を盗みに参り候…（中略）…右の土を盗みて鍋にいたし候⁴」という記述がみられる。この文中の小人がコロボツクルを指すとするのである。その後、作者不詳であるが、一八世紀末から一九世紀初頭に記された『渡島筆記』にはかかる小人つまりコロボツクルが「コロボクウングル」という名前で登場している。かように、江戸時代において、一部ではあるが既にコロボツクルというアイヌの伝説上の人物の存在が知られていたのであった。

明治時代になると、わが国の人類学および考古学の先覚者であるミルン（John Milne）が、その論攷⁵の中で逸速くコロボツクルをとりあげた⁶。しかしミルンは、単純に日本人の祖先つまり日本石器時代人をコロボツクルであると主張したのではなかった。ミルンは、前出の論攷の中で、父親の大シーボルト（Philipp Franz von Siebold）の日本石器時代人アイヌ説を継承した次男小シーボルト（Heinrich Philipp von Siebold）のアイヌ説を支援する一方において、石器時代にはコロボツクルと呼ばれた集団が、本州に

分布・居住していたアイヌと併立して北海道や千島列島に住んでいたと論じたのであった。

その後、日本人の祖先つまり日本石器時代人がコロボツクルであると強固に主張したのが、東京帝国大学理科大学教授坪井正五郎であった⁷。坪井正五郎の主張するコロボツクル説の特色は、大きく次の三点に要約できる。

（a）コロボツクルをアイヌの伝説上の人物とはせず、実在した集団であると看做したこと。

（b）コロボツクルはアイヌが北海道や本州に渡来した以前にこれらの地域に居住した先住民⁸と考え、日本の石器時代人の遺跡がこの集団のものであると看做したこと。

（c）コロボツクルは竪穴式住居に居住する小人で、現在グリーンランドに住むエスキモー（イヌイット）であると看做したことである⁹。

第二の説は、日本人の祖先つまり日本石器時代人がアイヌであるとする立場である。このような考え方は、江戸時代においても新井白石や近藤重藏、木内石亭、菅江真澄、松浦武四郎などによって提唱された¹⁰。下って明治時代に入ると、小シーボルトが上述したように、アイヌ先住民説を主張した。かかる小シーボルトのアイヌ説は当時多数の研

究者の支持を得た⁽¹¹⁾。その中でも強力にアイヌ説を推進したのが小金井良精であった。

小金井良精は、坪井正五郎が白井光太郎（当時MSと称していた）アイヌⅡコロボツクル論争を展開していた当初は静観していた。しかし、東京帝国大学の同僚である坪井正五郎と約二ヶ月にわたり、北海道の海岸地帯を中心とする旅行の結果、コロボツクル説を強力に唱える同行の坪井正五郎とは逆に、北海道の石器時代人はアイヌであるという考えに大きく傾注することになった。そして、その後の専門とする人骨を中心とした研究を通して、日本民族の起源はアイヌであるつまりアイヌ説を発表するまでに深化した⁽¹²⁾。小金井良精は、かかる提唱の根拠を明治三六（一九〇三）年三月八日東京学士会院で開催された講演会⁽¹³⁾で行なった講演の結論部分において、

即ちアイノ（アイヌのこと―筆者註）といふものは曾て石器時代の人民であつて、土器も拵へ、又堅穴に住つて居つた。さうして総ての石器時代の遺跡を残したのであると結論されて居ります。…（中略）…即ち今日色丹に居ります所の僅かに六十人ばかりの北千島アイノが、是が我々の刻苦搜索して居りました所の石器時代の

アイノと鉄器時代との連鎖であらうと思ひます。是が所謂一つのミスシリングリンク（missing link）とも言ふべきものであるものと思ひます⁽¹⁴⁾。と論じた。

かかる小金井良精に代表されるアイヌ説は、坪井正五郎が大正二（一九一三）年四月出張先のロシアのペテルブルク（現サンクト・ペテルブルク）の病院においての急死と同時に、コロボツクル説は消滅することになった。そのため、アイヌ説の全盛期をむかえることになった。

以上述べた第一の日本人の祖先つまり日本石器時代人コロボツクル説と第二の同アイヌ説には共通点がみられた。それは、両説が各々推定しているコロボツクルおよびアイヌという日本石器時代人は共に後世に日本列島に渡来したと想定される集団によつて、すべて駆逐されてしまったと看做すという点であつた⁽¹⁵⁾。

しかしながら、かかる点つまりコロボツクルおよびアイヌは本当に後世に日本列島にやつて来たと考えられる集団によつて駆逐されてしまったのだろうか。上述において紹介したように、大正二年四月にコロボツクル説を強力に主張する坪井正五郎が出張先で死去するに及んで、コロボツ

クル説は、いわば自然消滅するような形で消えてしまった。その結果、それ以降大正時代を中心に、論争の一方のアイヌ説が残り、日本石器時代人はアイヌと看做すしか他は考えられないという見方が大勢を占めるに至ったのである。⁽¹⁷⁾

ところが、かかるアイヌ説が全盛期であった大正時代において、既に明治時代に発掘された遺跡から出土した骨格などの比較検討より、現在の日本人とアイヌとの差は、石器時代人とアイヌとの間の差よりも小さいという事実が判明していた。しかしながら、当時はこの事実が忘却されていたのであった。その証拠に、アイヌⅡコロボツクル論争の中心的役割を果たした坪井正五郎および小金井良精の両名は、論争の当初から現在の日本人が石器時代人ともっとも縁の遠い集団であると決めつけていたのであった。⁽¹⁸⁾

なお、清野謙次によれば、上述のような決定が当然のような形で承認されたのは次のような理由からであったと指摘する。⁽¹⁹⁾つまり、その端緒はシーボルト父子（大シーボルト、小シーボルト）のアイヌ研究にみられるという。シーボルトによる現在の日本人後世渡来説が欧米の言語で発表されていた。そのため、当初日本人の間ではあまり知られていなかったが、前述したプレ・アイヌ説を唱くモースを

除く日本に來朝した欧米の学者間では先入知識に属していたからであった。このような理由で、欧米文化に心酔していた当時の日本では、かかる主張が日本人を感心させ、日本人の渡来時期を日本神話に出てくる国生みの時代、あるいは天孫降臨の時代に比定する考え方もみられる程であった。

第三の説は、以上論じた第一および第二の両説の共通点とも大いに関連する学説である。すなわち、現在の日本人後渡来説には根本的に無理があるという認識から生じた説である。清野謙次が、

若し日本人種ほど多数にして且有力なる人種が二千六百年前に外国から渡来したものならば、万人の考へて一致する日本人の故郷が海外に在る筈だ（米人の故郷は英國に在り、欧州に在る）獨り日本人の海外故郷なるものが千差万別帰一せざる事こそ、日本人の故郷は国外に在らず、国外に在る証である。日本人の故郷こそは、人類の住んで以来、後述の如く日本人より外には無かつた。⁽²⁰⁾と論じ、日本人の故郷は明確に断定していないが、日本列島以外にはないと看做した。

以上の清野謙次の学説は日本人種（民族）混血論へとつ

ながるのである⁽²¹⁾。

清野謙次は、大正八（一九一九）年以来収集した人骨などの調査・分析の結果、日本石器時代人が日本人の基礎となる人種であるとの結論に達し、この日本人の基礎とでも称すべき集団を「日本原人」と名付けたのであった。そして、その「日本原人」の中にアイヌも現在の日本人の祖先も含まれており、これらの集団が主体となって混血し、現在の日本人になったと看做したのであった。

（二）『有史以前』にみられる「固有日本人」説

鳥居龍藏は、前項でも述べた如く、坪井正五郎が主張する日本人の祖先コロボツクル説に対して、大いなる疑問をもった。しかし、坪井正五郎は公・私にわたりとくに世話になった恩師であったため、正面切ってかかるコロボツクル説に反対することができなかった。このように、鳥居龍藏が坪井正五郎の学説に対して疑問を抱くようになった動機は、コロボツクル説を証明するために、坪井正五郎の代理として北千島列島の調査に従事してからであった。それ故、なおさら、コロボツクル説には疑問さらには反対を唱えることができなかったのである⁽²²⁾。

しかしながら、本人の希望ではないが北千島列島調査に出かけたことなどから、不本意であったと推定されるが、アイヌ＝コロボツクル論争に巻き込まれることになり、自らの立場を表明せざるを得なくなった。また大正時代に入ると、鳥居龍藏は本州とくに畿内についての遺跡の発掘調査に参加することになった⁽²³⁾。そして、そこでの発掘調査の結果などから畿内においても石器時代が存在し、弥生式土器を製作していたことが判明した⁽²⁴⁾。

鳥居龍藏は、これらの発掘調査に参加することを通して、日本列島の石器時代には、初期（縄文時代）にアイヌが住みつき、その後（弥生時代）日本列島に渡来した、日本人の祖先と推察できる「固有日本人」も同様に石器時代には居住していた。つまり石器時代においては、先住民族であるアイヌと、その後に来住した「固有日本人」が共存していたと考えたのであった。以後鳥居龍藏は、自らの説を發展させ、自身が唱える「固有日本人」こそが現在の日本人の祖先であると強く主張することになるのである⁽²⁵⁾。

かような鳥居龍藏の主張は、恩師坪井正五郎のコロボツクル説と対立するアイヌ説を完全に是認するものではなかった。しかし当時、石器時代人が日本人の祖先であると考え

られていたため、その時代に最初に日本列島に住みついた集団がアイヌであるとする鳥居龍藏の見解は、アイヌ説に傾斜しているといわざるを得ない。⁽²⁶⁾ 鳥居龍藏としては、石器時代には自らが唱える「固有日本人」も居住していたことを主張し、アイヌ説ではないことを強調しなかったものと推定される。

以上述べた特徴を有する鳥居龍藏の「固有日本人」説はその後⁽²⁷⁾に出版された大著の中で集大成されたが、前項で紹介した日本民族起源説の第三の説に近い学説といえる。しかし、第三の説は、上述したように、先住民アイヌと日本人の基礎的な人種（清野謙次の唱える「日本原人」）が主体となって混血して、現在の日本人が形成されたという立場であった。一方鳥居龍藏は、アイヌとはまったく異なった集団である「固有日本人」が大陸から朝鮮半島経由で来島し、日本列島の各地に分布・居住していたアイヌを追放する形で、現在の日本人の祖先となったと考えたのであった。すなわち、前項で紹介した第三の説と共通しているのは、先住民であるアイヌが分布・居住していた石器時代に、日本人の祖先と推定される集団が存在していた点である。他方異なる点は、このような集団が、石器時代の当初つま

り縄文時代から日本列島に分布・居住していたと看做すか、後代つまり弥生時代に渡来して来た集団であるとする点と、アイヌと現在の日本人につながると推定される集団が混血したと考えるか、一方が他方を追放したとするかの二点であると思われる。⁽²⁸⁾

上述のような理由から、鳥居龍藏は「固有日本人」説を提唱することになったのであった。しかし、かような持論を展開することになったが、上述した大著の中においても、古い時代の日本人つまり日本人の祖先の解明に関しては、次に述べる二点から非常に困難であると指摘する。⁽²⁹⁾ すなわち、その第一点としては、人種上⁽³⁰⁾からみて日本人が単一民族であるか、複合（族）民族であるかの構成の問題があげられる。第二点としては、第一点の後者つまり複合（族）民族であるとするれば、どのような民族集団が集合して、現在の日本人を形成しているかという問題があげられる。

鳥居龍藏は「固有日本人」が日本人の祖先であると推定したのであるが、その「固有日本人」は単一民族ではなく、日本民族の主要な部分を形成している集団であると看做した。つまり、「固有日本人」の中心は、拙論⁽³¹⁾でも論じたように、『日本書紀』や『古事記』に記載されている国津神

系の土着集団で、彼らの出自は、

朝鮮を経て北方民族が漸次渡来し、長年月間ここに土着して聚団を為したるものと見るべきであつて、その石器時代の遺跡・遺物は、海を隔てたる朝鮮・シベリア・満州・蒙古等のそれと、聯関して居るのである。⁽³²⁾

と看做していた。そして、その他に、インドネシアおよびインドシナ民族の一部が混っていると主張する。かかる点が鳥居龍藏の「固有日本人」説の特色となっている。以下では、この点を中心に論をすすめていくことにする。

インドネシア

インドネシアは、その大多数を占める「固有日本人」とともに、現在の日本民族の形成に関与したと看做される集団である。一般にはマレー人種（あるいは民族）と称されることが多い。しかし鳥居龍藏によれば、マレー人種に関しては、そもそもマレーという用語それ自体に語弊があると主張する。というのは、マレー人種はマレー語を使用する集団なのであるが、固有マレーおよびインドネシア（狭義）に大きく二分されるという。⁽³³⁾ それ故、本稿においてもかかる鳥居龍藏の見解に従つて論を進めていくことにする。

前者の固有マレーとは、多くが回教を信じ、アラビア文字を用いている集団である。またこの集団はインド文化の影響を強く受け、文化程度もきわめて高い民族集団である。かかる固有マレーは、主要分布地域によつて東マレーおよび西マレーの両分派集団に細分できる。東マレーはスマトラ島が揺籃の地で、その後マレー半島に移住し、そこが基点となつた。さらにこの分派集団は、ジャワ島、スンダ列島、マラッカ諸島、スラウェシ島などをはじめ東南アジアの島嶼部を中心に展開していった。これに対し西マレーは、アフリカの西海岸沖に位置するマダガスカル島を主体に分布している。この分派集団はスンダ列島付近が発祥地であり、そこから西進してアラビア海を横切り、マダガスカル島に來住したと考えられている。

以上の東マレーおよび西マレーの両分派集団はともにそれぞれの故郷より他地域に移動していったという歴史をもつ。しかも、その移動が古くはないという点が特色といえる。すなわち、東マレーの場合、この分派集団に残っている記録などによると、彼らがマレー半島の先端に位置するシンガポールに移住し、殖民を開始したのが一二三八年と考えられている。同様に西マレーの場合、マダガスカル島

に来島して住みついたのが七、八世紀と推定されている。これらの事実が正しいとすれば、東マレーおよび西マレーに二分される固有マレーは、年代的にも日本の石器時代の「固有日本人」とはまったく関係のない集団であるといえる。

一方インドネシアンは古いマレー人種の型式を残している分派集団である。それ故、現在ではプレ・マレー (Pre-Malay) あるいはプロト・マレー (Proto-Malay) と呼ばれることが多い。この集団の特徴は前者の固有マレーと比較すると、一般に低身で文化程度も高くない。衣服に関しても、男性は腰に褌、女性は腰巻きだけを付けるというようにほぼ裸体に近い。また女性は首や手などにそれぞれ輪をはめ、男性は身体の各所に入れ墨をし、腰には刀をさげている。さらに現在においても、伝統的な首狩りの習慣が残っているという。

この分派集団の分布地域としては、スマトラ島、ボルネオ島、セレベス島、フィリピン諸島および台湾などが中心となっている。⁽³⁴⁾ 鳥居龍藏によれば、日本人の祖先を南方に求める南方論者の多くがジャワ島を日本人の起源地と推定している。しかし、ジャワ島はあまりにも日本列島から遠

く離れているので日本人の起源地としては考えにくく、むしろ日本列島に近接しているフィリピン諸島あるいは台湾が起源地ではないか、と思われるという。⁽³⁵⁾

以上から鳥居龍藏が主張するインドネシアンは、直接単純に日本列島に渡来したのではなく、日本列島に到着した当初から体質上は異民族の血が既に混入していたと考えられる。かかる証拠の一つに、現在の日本人の一部にみられる、いわゆる縮毛は、北方民族の間ではみられない現象のみならず、純粋にマレー人種の特徴ともいえない。縮毛はネグリートの血が入っていることを証明するものである。すなわち、現在の日本人の一部にこの縮毛がみられるということは、ネグリートの血が混在しているインドネシアンが、日本人の構成要素となっていることを示しているといえるのである。⁽³⁶⁾ かかる事例は、台湾に居住する先住民族の場合においても該当する。つまり、先住民族間でも、アミ族やパイワン族の中には縮毛がみられるが、タイヤル族間にはみられない。このような事実は、ネグリートの血が入っているインドネシアンとの交雑の程度であると看做すことができる。⁽³⁸⁾

それでは、なぜ上述したようにインドネシアンにはネグ

リートの血が混入されたのであろうか。鳥居龍藏の指摘⁽³⁹⁾によれば、インドネシアンの主要居住地域であるマレー諸島⁽⁴⁰⁾は、元来ネグリートが居住する島嶼であったことに起因するという。そのネグリオートの身体的な特徴が、低身かつ縮毛だったのである。ネグリートは、後世インドネシアンがマレー諸島に侵入するにおよんで、ルソン島北部の山間部に逃亡した一部の人々を除いて、征服され消滅してしまつたのである。

以上のような特色を有する集団は、鳥居龍藏によつてインドネシアン系統日本人と名付けられたのであるが、かかる集団の先住地域から推察できるように、九州地方を本拠地としていたと考えられている。また、この集団の渡来時期は「固有日本人」の渡来よりも後で、黒潮（日本海流）を利用して、丸木舟に乗船して来島したであろうと推定されている。そして来島後、かかる集団は広く「固有日本人」と混血していったと考えられる。⁽⁴²⁾

インドシナ民族

鳥居龍藏は、インドネシアンと同様に、「固有日本人」と混血し、現在の日本人を形成した民族集団として、インドシナ民族を想定している。⁽⁴³⁾その理由は、この民族集団が主

として西日本各地から出土する銅鐸を遺したからであると主張する。すなわち、出土する銅鐸の模様や意匠、さらにはその表面に描かれている人物あるいは風俗などを検討してみると、「床の高い家に住み、臼杵を以て穀物を巻き、鹿狩りもして居た時代の遺物であることが知れる」と述べる。⁽⁴⁴⁾

以上、銅鐸に描かれている遺物は「固有日本人」の遺物とはまったく無関係であると指摘する。鳥居龍藏によれば、これらの銅鐸は揚子江（現在の長江）の南から出土する銅鼓との関係が深いものと思われる。またその製作者は、「固有日本人」と混血したインドネシアンではなく、揚子江の南側すなわち南中国に古くから分布・居住していたミャオ族系統のインドシナ民族の手によるものであると推定できる。というのは、現在の南中国には、先住民として漢民族が卓越しているが、このような状況になったのは時代的にいえば後世のことで、彼らが当地域に進出するまではミャオ族をはじめとする異民族の居住地域であった。⁽⁴⁵⁾つまり当時の南中国は、その南に位置するインドシナ半島と深い関係を有し、呉、越、楚などはミャオ族系統の集団が建設した国家であったという。⁽⁴⁶⁾以上のような観点から鳥居龍藏は、日本にも南中国にかつて分布・居住していた、ミャオ族の

集団の血が混血していたと看做し、平均的な日本人が低身であるのはかかる集団の血が入ったためであると考えた。⁽⁴⁷⁾

鳥居龍藏はインドシナ民族を具体的にはどのような民族集団と把握していたのであろうか。鳥居龍藏は、かかる民族集団がビルマ族、タイ族、南中国に分布する漢民族以外の民族の三つの集団から構成されると考えていた。そして、これらの三集団は、風俗や文化においては相違点が認められるが、マレー語ではなくモノシラビック（中国語系統）の言語を使用するという共通点が認められるとした。

ビルマ族は現在のミャンマー（ビルマ）に分布・居住する集団であるが、彼らに伝わる伝説によれば、チベットの東南部の山地から移動して現在の地に住みついたという。タイ族は、タイを筆頭にベトナムなど広くインドシナ半島に分布・居住する集団である。口碑によれば、紀元前一世紀ごろ、インドシナ半島北部と接する中国の雲南地方から南下してきたとされる。

以上のビルマ・タイの両民族は、いずれも上述したように、チベットあるいは中国の雲南地方から移動してきた集団であった。これら両民族がインドシナ半島に移動して定住する以前には、土着の先住民族が居住していた。しかし

現在では、後にやって来たビルマ・タイ族を筆頭とする集団との混血になったものが多いが、元来は身体的な特徴などから判断すると、インドネシアンかあるいはネグリートであると推定される。それ故、このことから、インドシナ民族と称しても、インドシナ半島で多数を占めるビルマ・タイの両民族は直接「固有日本人」とは関係をもたない集団といえる。⁽⁴⁸⁾したがって、インドシナ民族の中でも、南中国に分布・居住する漢民族以外の民族集団のみが「固有日本人」と関係を有する集団となるのである。以下では、この点を中心に詳細に検討していくことにする。

これらインドシナ民族は基本的には雲南、貴州、四川、広西、広東、湖南、福建、浙江の各省および自治区に分布しているが、民族ごとに、例えば、貴州省にはミャオ族を中心し、ヤオ族やトン族などというように、少数民族が居住している地域が異なっているという特色がみられる。鳥居龍藏は、かかる民族集団の中でもミャオ族が「固有日本人」と深い関連がある集団と看做したのであった。理由は次の二つが考えられる。

その第一は、上述したように、インドシナ民族の中でも、西南中国を拠点とし、一部はインドシナ半島北部の山岳地

帯にまで南下しているミャオ族が、わが国の銅鐸に類似したと考えられる銅鼓を伝統的に所有しているからである。⁽⁴⁹⁾ その第二は、台湾の先住民族の一分派である、かつて鯨面蕃とも称されたタイヤル族とミャオ族の一部が同一集団であるという、ラクーペリー⁽⁵⁰⁾ (de Lacouperie, T.) の説に賛同したことがあげられる。すなわち鳥居龍藏は、台湾に住む先住民族を日本人の祖先を形成する集団であると考えていたからである。⁽⁵¹⁾

以上のような経緯でミャオ族に対して興味・関心をもった鳥居龍藏は、その信憑性を確かめるために、ミャオ族の本拠地である貴州省に単身出かけたのであった。その調査で鳥居龍藏はミャオ族をどのようにみたのであろうか。ミャオ族に関しては、学術的な報告書および調査記録をまとめた旅行記⁽⁵³⁾を刊行している。それ故、鳥居龍藏のミャオ族調査の概略は詳細に判明している。本稿では、鳥居龍藏の主張する「固有日本人」説との関連において、かかる説を集成したと看做される大著『有史以前の日本』の中で論じられている、ミャオ族に関する内容を中心に検討していくことにする。

貴州省は、現在ミャオ族分布の最大の拠点となっている。⁽⁵⁴⁾

同省は、他の省よりも遅れて漢民族の進出・支配地⁽⁵⁵⁾になったことや、交通の便が大変劣悪な僻地に位置しているという歴史のおよび地理的条件から、現在においても伝統的な風俗や習慣を維持しているミャオ族が多く残っている。それ故、日本人の祖先を探る鳥居龍藏にとっては最高の条件を満たしていたのであった。⁽⁵⁶⁾

なお鳥居龍藏は、ミャオ族の自称を「ムン」(Mun)といい、「人」を表わすとしている。そして現在の「ミャオ」という呼称は、この「ムン」からの転化であろうと推定する。⁽⁵⁷⁾ この点については、現在では肯定する研究者は少ない。つまり「ミャオ」(Miao)と自称する集団は、自称「モン」(Mon)と称する川黔滇方言⁽⁵⁸⁾を話すミャオ族の一部に確かに存在するが、しかし現在では、「ミャオ」という名称は漢民族を筆頭に他民族が付けた他称とされる。さらに、かかる「ムン」という名称は、漢族が南方に分布・居住する民族集団を総称して「蛮」(Man)と呼んだが、その「蛮」とも同じ発音であり、「人」という意味であった。⁽⁵⁹⁾ すなわち鳥居龍藏は、古代において、漢民族が江南の地つまり南中国に進出する以前に当地域に居住していた民族集団の総称として、ミャオ族を想定するほど、当時において

はミャオ族は、南中国では有力な民族集団を形成していた。

鳥居龍藏は、ミャオ族を、

頭の髪は黒き直毛であつてその量極めて多量なるのみならず艶々しき漆黒色を呈して居る。髯は少なく顔は円型が多く、その眉が一般に濃く眉尻は殊に太くして下がつて居る。この眉の癖は彼らの特徴の一つである。身長はごく小さく、他の民族よりも最も小さい。今その平均測定を示せば一五五センチメートルで極小の者は一三九センチメートルの者もある。頭の形は中頭に近き亜広頭で胸の割合に脚部短の横平たい形をして居る。言葉は単音よりなつて居て文法は北方の民族のように上から下まで来ず、すなわちその置き方が互いに上下して居る⁽⁶⁰⁾。

と論じ、身長などの体質および文法を中心とする言語の両側面から、自らが主張する典型的なインドシナ民族の特徴を有しているとする⁽⁶¹⁾。

またミャオ族は、田畑を開発して農を以つて生計の基本とする農業の民であり、主として水田稲作を生業の中心としている。しかも、その水田稲作は、北方起源の民族である漢民族より古くから行なっていた。すなわち、粟や稗などの雑穀主体の農業経営に従事していた漢民族は、南下し

てミャオ族と接すること、水田稲作の技術を習得したと指摘する。このように、ミャオ族は現在では農業が主体となつて居る。それ故、彼らの性格は従順であるが、かつては陰鬱性で慄悍であつた。かような伝統は、彼らが「ハレ」の日に演奏する蘆笙と称される独特の縦笛などの楽器の音色や歌謡、さらには民族衣裳の色彩にも認められるとする。なおミャオ族には、特有の染色法が存在する。それは蠟纈絞りなのであるが、その模様が隋（五八九―六一八年）あるいは唐（六一八―九〇七年）時代の漢族のものと類似している。そのことから、その当時に伝来したと推定される、わが国の正倉院や法隆寺に残っているものとの比較が待たれるという。

以上、鳥居龍藏は現在南中国に主として分布・居住するミャオ族の体質、言語あるいは水田稲作を中心とする生業形態などから判断して、日本民族との類似点が非常に多数みられることに注目するのである。そして、西南中国調査においては、ラクーペリーが主張するように、ミャオ族が台湾の先住民族の一分派と同集団であるという確証が得られなかった。しかし、かような特色をもつ民族が、「固有日本人」を形成する集団の一つであることについては強い

自信をもつようになるのであった。

さらに、鳥居龍藏は既に本文においても言及したように、わが国の銅鐸に類似したものととして、銅鼓をとりあげ、それがミャオ族系統のインドシナ民族の特色であると推察していた。この点については、実際に現地に出かけ調査した結果、次のようなことが判明した。⁽⁶²⁾

すなわち鳥居龍藏は、銅鐸について、その製作年代を嚴格ではなく、仮にはあると断つて三時期に区分し、順次変化していったものと看做した。その第一期の銅鐸は、形状が比較的小さく、長さ（高さ）は左右（幅）に対して高くないというものである。銅鐸の表面には区画が読みとれ、それぞれの区画の中には人、獣、鳥、魚、舟などの図画が鮮明に描かれている。第二期の銅鐸は、形状が第一期のものとはほぼ等しいが、銅鐸表面の図画がやや省略されている。第三期の銅鐸は形状が巨大化し、細長くなっているのが特徴で、銅鐸表面の図画がまったくなくなってしまうている。さらに、銅鐸の質も第一期のものは黒味を帯びているが、第三期になると緑色を呈するようになる。これは、それぞれの時期に製作された銅鐸に含まれている合金の化学的成分が異なっているためであると推定できる。

一方、銅鐸同様青銅器の壺型をした太鼓である銅鼓に関しては、鳥居龍藏はドイツの歴史家ヘーゲル（H. Heger）の論文を参照し、銅鐸同様四形式に区分できるという。しかもこれら四形式は、銅鐸と同じように順次変化していたと看做している。その第一のものは、胴部（側面）が高いという形式をしており、表面には蛙などの動物が置かれ、側面には種々の紋様がみられるのを特徴としている。さらに輪郭にも、人、獣、魚、植物、家屋、舟などの図柄が描かれている。形式としてはもともとも古いものとされる。南中国、トンキン（ベトナム北部）、マレー諸島と広範囲に分布している。第二のものは第一の形式と類似しているが、表面および側面に描かれている図柄が多少省略されている。分布の中心は東南アジアの大陸部である。第三のものは、第二のものと形状および描かれている図柄や紋様がほぼ同じであるが、表面には第一の形式にみられた蛙などの動物が置かれている。現在でもミャンマーに住むカレン族やラオスに分布するシャン族などが使用している。最後の第四のものは、前三者の形式とは若干異なっている。すなわち、側面が縮んで短くなり、表面にみられた蛙などは省略化されて置かれているか消滅している。漢民族の影響を多少受

け、胴部などにみられた人物や鳥などの図柄が消え、その代わりに漢字や中国的な絵柄が描かれているものもある。南中国に分布するミャオ族が使用しているものが代表的である。鳥居龍藏は、この種の銅鼓を西南中国調査のとき貴州省の省都貴陽市近くで入手した⁽⁶⁴⁾。

鳥居龍藏は、以上のように四つの形状に区分される銅鼓が、形状、図柄の状態、合金術の相違などについて銅鐸と類似点が見られるという。その中でも銅鐸は、第一の形式の銅鼓ととくに類似しているとする。しかしながら、残念なこと西南中国調査中に発見した銅鼓は、第一の形式ではなく、第四の形式のものであった。しかし鳥居龍藏としては、ミャオ族が銅鐸に類似した銅鼓を所有していたことについては、ミャオ族系統のインドシナ民族が「固有日本人」の形成に関与しているという持論を補強することになると考えたのであった。

(三) 「固有日本人」説後の展開

鳥居龍藏は、前項でやや詳細に論を展開したのであるが、日本人の祖先つまり日本石器時代人を自身が強力に提唱する「固有日本人」と看做したのであった。かかる鳥居龍藏

の主張する「固有日本人」は、恩師坪井正五郎が唱えるコロボツクル説と対立するアイヌ説に近いものであった。つまり、本人自身否定しているが、本文でも言及したように、千島列島を含む日本列島の先住民族はアイヌであることを認めた。

しかし、そのアイヌは、大陸から伝来した「固有日本人」によつて北海道を主体とする北方の僻地に追放されてしまった。それ故、アイヌは日本列島に分布・居住していた先住民族であることに違いないが、現在の日本民族とは何ら關係を有しない集団であるとする。しかも、鳥居龍藏の「固有日本人」説の特徴は、かかる「固有日本人」は単一民族から構成されるのではなく、南方起源であるインドネシア人とインドシナ民族の一部が混血している複族民族であると看做す点であった。鳥居龍藏は、その証拠を求めて遠く西南中国にまで出かけるのであった⁽⁶⁵⁾。

その後、尾張国（現、愛知県）熱田の貝塚より出土した弥生時代と推定される人骨（熱田弥生人と称される）を分析すると、かかる人骨がアイヌ、現代日本人のいずれにも類似しない固有の特徴がみられるとともに、一方では現代日本人と著しく類似する特徴も存在することが判明した。

そのことから、このかかる熱田弥生人は、アイヌよりも現代日本人との関係が密であるとの結論に達したのであった。⁽⁶⁶⁾ かような結論も、「固有日本人」説を補強する事例と考えられた。つまり鳥居龍藏のこの説は、池田次郎が指摘するように、全盛期を迎えたのであった。⁽⁶⁷⁾

しかしながら、鳥居龍藏が提唱した「固有日本人」説は、とりわけ全国各地において石器時代の人骨が多数発見されるに及んで、新しい学説にとつて代わられることになった。

その第一の新しい説は、既に紹介した清野謙次が強く推した日本人種（民族）混血説とでも称すべきものである。

清野謙次は、西日本を中心に古人骨の収集に努めた。⁽⁶⁹⁾ そして、主としてポニアトフスキーの型差平均公式を用いて、これらの収集した古人骨と現代の日本人およびアイヌの骨格との比較を、統計学的に行なった。⁽⁷⁰⁾ そして、かかる作業の結論として、自らが唱える「日本原人」こそが日本人の祖先であると主張するように到ったのである。このような清野謙次の「現日本人」説は、従来の学説がすべて主観主義的傾向が強かったのに対して、それ以降のかかる論争を生物学的な研究レベルにまで引き上げるといふ科学的な研究態度の基礎を築いたという点で、功績が大であるとされ

る。⁽⁷²⁾

かかる鳥居龍藏の「固有日本人」説および清野謙次の「日本原人」説の両説を引き継いだのが濱田耕作であった。濱田耕作の研究態度は前時代を中心に活躍した坪井正五郎や鳥居龍藏とは異なり、徹底した考古学的手法を採用した。すなわち、出土した遺物よりも、遺跡の発掘調査を重視し、発掘時の層位関係や共伴関係に留意しつつ、遺跡の構造や分類を考察してから遺跡の年代を決定するというものであった。また国内発掘の成果を広くアジア各地の遺跡と比較することも忘れなかった。そしてこのような一連の作業を通して文化の系統を論証しようとするものであった。⁽⁷³⁾ そのような研究態度を一貫して貫いた濱田耕作は、自身が中心となって発掘を実施した河内国の国府遺跡の第二次発掘調査の結論として、

即ち今日に於いては日本新石器時代の住民は現代アイヌの直接の祖先に非ず、而かもアイヌと頗る近似せる一人種が基礎をなし、已に既に他人種との混和を見たるものにして、此の新石器時代人種こそ現代日本人の基礎をなし、已に既に他人種との混和を見せたるものにして、此の新石器時代人種こそ現代日本人の基礎をなせる「原

日本人」と称し得るものなりと謂ふを以て最も穩当なりとす可きか。⁽⁷⁴⁾

と論じた。

つまり濱田耕作も鳥居龍藏や清野謙次と並んで、日本石器時代人は混血種であると強く唱えたのであった。⁽⁷⁵⁾その後、かかる清野謙次および濱田耕作の日本人（民族）混血説を継承したのが金関丈夫であった。⁽⁷⁶⁾

以上の清野謙次の新しい説に強く反論を唱えたのが、長谷部言人であった。長谷部言人の学説の特色は、石器時代以降において日本人の体質を大きく変化させるような大陸をはじめとする周辺地域からの渡来、つまり混血は認められないとする立場である。すなわちかかる立場は、日本列島の住民が遺伝的にいっても連続した集団である点の特徴とするもので、一般に変形説と称されている。⁽⁷⁷⁾

長谷部言人は、以上述べたように、現代の日本人は石器時代の住民の末裔で、それ以降の体質の変化は生活様式の変化が原因であると看做したのであった。しかし、かような立場を明確にしたのはかなり遅く、昭和一五（一九四〇）年に発表した論攷の中において、

尤も骨格の上では石器時代人と現代日本人との間に幾

分の差異はあります。これは四肢の筋肉の發育など、関係のある問題でありまして、これが為めに日本人でないなどとは申されないであります。何を以て石器時代人は日本人でないと言ふか甚不思議に堪へないのであります。⁽⁷⁸⁾

と論じたのが最初であった。⁽⁷⁹⁾さらに翌昭和一六年に発表した論文⁽⁸⁰⁾の中では、かかる立場を一步前進させた。つまり、その結論部分においては、石器時代人が甲と混血して日本人となり、また乙と混血してアイノとなったというような説は奇妙な説で、甲は日本人、乙はアイノ以外に求められるはずがないと、清野謙次に代表される日本人混血説を強く否定する。また、日本石器時代人は太平洋アジア民族の一つで、アウストラリア人、メラネシア人、ミクロネシア人、アイノ、日本石器時代人、ポリネシア人、インドネシア人などと関係を有する集団であるとした。すなわち、これらの民族集団は、上述したような順序で、最大頭長を減じるとともに、最大頭幅を増長する関係を持ち、はるか以前から石器時代人が無縁孤立の独立した集団ではなく、太平洋アジア人（Ozeano-Asiaten）の枢軸に位置する集団であるという。⁽⁸¹⁾

以上論じたような特徴を有するのが、長谷部言人のいう変形説であった。その研究方法は、対立する清野謙次のそれとは好対照とでもいべき方法であった。つまり、長谷部言人の研究方法は、主として東日本から出土した人骨をその研究材料としたが、人骨の計測値を重視する統計学的手法を採用せず、「洪積世人類の骨格特徴にみられる時代的变化の説明原理を日本人種論に導入した」⁽⁸²⁾という点に特色があるとされた。

長谷部言人が、上述のような立場を踏襲するようになったのは、北京原人の研究で著名なワイデンライヒ (Franz Weidenreich) 説を採用したからであるという。つまり長谷部言人は、ワイデンライヒの「シナントロプスとピテカントロプスとの差異は種々の標徴において進化の程度が一致しないと解せられ、人種がちがうとはいえない」⁽⁸³⁾という立場に立脚したのである。そして、かような人類特有の進化現象を念頭に置けば、

縄文土器時代人が進化して、弥生式土器時代人になり、古墳時代人は必ずしも急激には現われず、極めて漸徐に進行したにちがいない⁽⁸⁴⁾。

という結論に到ったのであった。かかる変形説は、第二次

世界大戦後になって鈴木尚⁽⁸⁵⁾に引き継がれることになった。

以上述べた清野謙次に代表される日本民族混血説、および長谷部言人にみられた日本民族変形説の二つの新しい説は、鳥居龍藏の「固有日本人」説と同じではないが、既に論じてきたように両説とも「固有日本人」説を母体として成立したと看做することができると思われる。

(四) 小結——結びに代えて——

鳥居龍藏は、前々稿⁽⁸⁶⁾で紹介したように、「鳥居さんのドルメン」と研究者間で度々呼ばれるほど、ドルメンを中心に巨大遺跡を残した巨大文化に関して強い興味を有していた。⁽⁸⁷⁾そのため、シベリア、満州、蒙古、朝鮮半島など日本列島周辺地域の発掘調査は勿論のこと、国内においても宮崎県の日向地方を中心とする調査⁽⁸⁸⁾でも、ドルメンを筆頭とする巨石遺跡の発掘に努めた。このように各地での発掘調査を実施しているうちに、ドルメンなどの巨大遺跡を築いた担い手およびその特有の文化に関しても学問的興味をもつようになった。鳥居龍藏が主張することになった「固有日本人」説は、恩師坪井正五郎の影響が大きいのであるが、かような巨大遺跡を築いた担い手がその中核を形成した集

団と看做したのであった。

以上みてきたように、鳥居龍藏が日本人の祖先つまり日本石器時代人が「固有日本人」であると断言するようになったのは、上述したようにシベリア、満州をはじめとする日本列島周辺地域での発掘調査を主体としたフィールドサーヴェイの成果によることも大きい。日本国内での精力的な発掘調査によるものであった。すなわち、日向地方調査とともに前稿⁽⁹⁰⁾で論じた信濃調査は、例えば、大正九（一九二〇）年五月に行なった有明神社境内の調査でドルメン式古墳一基を発見するというように、かかる意味において特記されるべき調査であったといえる。このような学問的経過を通して形成された鳥居龍藏の「固有日本人」説は、本稿で指摘した如く、とりわけ恩師坪井正五郎の没後自らが強く否定したにもかかわらず、アイヌ説の流れを組む新説として、その全盛期をみるに到ったのであった。

しかしながら、鳥居龍藏が提唱した「固有日本人」説も、考古学を中心とする学問分野における著しい進展の結果、より新しい学説にとって代わられることになった。それは、清野謙次に代表される日本人（民族）混血説と長谷部言人を中心とする日本人（民族）変形説である。これら清野・

長谷部両名を中心とする新説に関して、再度要約する余裕をもたない。

しかし、鳥居龍藏の説と明確に異なる点は、「固有日本人」説を含む従来の学説では、その根拠が研究者自身の主観主義的な傾向が強く感じられた。それに対して、清野謙次および長谷部言人の両名が主張する各々の新説は、両名がともに医学部の教授という自然科学者であることも大きく起因すると看做されるのであるが、研究態度が生物学的なレベルにまで向上し、より客観的および科学的な分析作業を通して発表された学説であるという事実である。⁽⁹¹⁾とはいうものの、両学説は、鳥居龍藏が主張する「固有日本人」説を基盤あるいは土台として形成されたものであるといえる。かかる意味からも、鳥居龍藏の日本民族の起源に対する先見性は高く評価されなければならないと思われる。

その後更なる科学的な進展の結果、埴原和郎によれば、現在日本人の起源つまり祖先に関しては、次のような特徴が確認できるという。⁽⁹²⁾

- ① 日本人の基盤は縄文人である（旧石器時代人を除く）。
- ② アイヌ、琉球人は日本人の中に含められる集団である。

③ 現在の日本人にみられる体質上などの地方差は、従来より認識されていたよりも程度が高い。かかる原因を解明しなければ日本人の起源と形成の過程を正しく把握できない。

④ 日本人の形成基盤として、東アジアの南部（華南地方）と北部（シベリアなどの寒冷地帯）に分布する諸民族集団と関係がある。

つまり現代の日本人は、縄文時代の体質上の特徴をそのまますべて維持しているのではなく、主として弥生時代から約二〇〇〇年の時間の中で、自然および文化環境の変化に応じて進化すると同時に、在来種と渡来系の集団との混血も進んできたとされる⁽⁹³⁾。

以上述べた埴原和郎が主張する学説が最新の日本民族起源論なのである。しかし、かかる日本民族起源論は、上記の①を除けばあまりにも鳥居龍藏が提唱する「固有日本人」説に近いことが判明する。鳥居龍藏は日本民族起源論に關しても、大きな誤謬を犯していなかったのである⁽⁹⁴⁾。

その傍証の一例として、第二次世界大戦後に唱えられた江上波夫の騎馬民族日本征服論⁽⁹⁵⁾があげられる。江上波夫は、その著作の中で紀元前四ないし五世紀ごろ、東北アジアの

遊牧民族の末裔である騎馬民族が南下して、朝鮮半島經由で日本列島に渡来し、そこに居住していた先住民民族を征服し、統一王朝つまり大和国家を樹立したという壮大な仮説を提唱したのであった⁽⁹⁷⁾。かかる江上波夫の主張は、大筋において鳥居龍藏が唱える「固有日本人」の核心部分の日本列島への伝来経路とほぼ一致するのである。

以上論を展開してきたように、鳥居龍藏が唱えた「固有日本人」説こそが日本民族の祖先であったとする立場は、その後も日本民族起源論に大きな影響をもつものであった。かように、鳥居龍藏の説が長く影響をもつことになったのは、鳥居龍藏の立場が机上で考察した理論ではなく、現場でのフィールドサーヴェイの結果から得られた多数の資料によって構築された学説で、筆者のいう実証主義的な研究態度より生じた説であるからだと思われる。かかる学説を完成させるための、国内のフィールドの一つが本稿で論じてきた信濃であった。

なお、日本民族起源論に関しては本稿で紹介・検討を加えた研究者の見解以外にもみるべき説が多く存在する。しかし冒頭において述べた如く、本稿の主旨は、日本民族起源論全体をフォローし、分析することではないので、割愛

した学説も多いことを断っておきたい。日本民族起源論に関する検討・分析は他日稿を改めて論じたい。

註

(1) というのは、例えば下記の埴原和郎の見解に代表されるように、日本人の祖先を検証する手段として、発掘された人骨から抽出されたDNAを解析するというような新手法が使用された。これらの新しい解析手法は鳥居龍藏の時代には存在しなかったものである。

埴原和郎(一九九六)『日本人の誕生 人類はるかな旅』吉川弘文館(歴史文化ライブラリー)など。

(2) 当時、日本列島に人々が最初に住みはじめたのは石器時代(現在でいう縄文・弥生時代)と考えられていた。それ故、石器時代人が日本人(民族)の祖先になるのである。なお、拙論の中において論じたように、日本の石器時代人は現在の日本人とは直接つながりをもたない、日本列島の先住民であるという議論も存在する。

田畑久夫(二〇〇〇)「鳥居龍藏と信濃調査(上)——日本民族起源論との関連を中心に——」昭和女子大学文化史研究四、一三ページ。

さらに、上述の議論を受ける形式で、日本石器時代の住民と、日本人起源説とを学説史上区分して論じている次の論文もみら

れる。

清野謙次・金関丈夫(一九三五)「日本石器時代人種論の変遷」、東京人類学会編『日本民族』岩波書店、九〇八二ページ所収。

(3) これらの三説に関しては、主として清野謙次の以下の三説を参照した。なお清野謙次は、かかる三説を江戸時代および明治時代に区分して論を進めているが、本稿で言及したのは鳥居龍藏との関連が深い明治時代の説である。

清野謙次(一九四四)『日本人種論変遷史』小山書店、二七〇五八ページ。

(4) この漂流記の記事は清野謙次の以下の書物に引用されている。前掲(3)九〇一〇ページ。

(5) Milne, J. (1882) 'Notes on the Koro-poku-guru or Pit-dew-ellers of Yezo and the Kurile Islands' Transactions of the Asiatic Society of Japan, Vol. 10, pp. 187-198. 同論文は以下の書物の中で翻訳されている。

吉岡郁夫・長谷部学(一九九三)『ミルンの日本人種論——アイヌとコロポックル——』雄山閣出版、二二三〜二四七ページ。

(6) 沼田頼輔によれば、下記の著作の中でミルンが論じたコロポックル説に関しては、「其の説たる、主としてアイヌおよび千島土人の記載に止まりて」(二三ページ)という状態であった。すなわち、コロポックルをはじめて世間に注目させたのは、ア

イヌ語研究で大変著名なバチェラー (John Batchelor) であつたと指摘する。

沼田頼輔 (一九〇三) 『日本人種新論』 嵩山房。

本稿では、寺田和夫および工藤雅樹などの見解により、明治時代においてコロボツクル説を普及させたのはミルンとした。

寺田和夫 (一九七五) 『日本の人類学』 思索社、五〇ページ。

工藤雅樹 (一九七九) 『研究史 日本人種論』 吉川弘文館、六六―六七ページ。

- (7) 日本石器時代人アイヌ説を唱える同僚である東京帝国大学医科大学教授小金井良精などとの間で激しく争われた、いわゆるアイヌ＝コロボツクル論争との関連において、坪井正五郎が主張するコロボツクル説は既に拙論で論じたことがある。それ故、かかる拙論との重複を避けるため、本稿では、坪井正五郎が主張するコロボツクル説に関しては、その概要を最小限にとどめた。

田畑久夫 (一九九八・A) 「鳥居龍藏と北千島―調査記録よりの分析―」 昭和女子大学文化史研究創刊号、六二―一〇五ページ、とくに八一―九〇ページ。

- (8) 清野謙次によれば、坪井正五郎がかような見解をもつようになったのは、モース (Edward Sylvester Morse) のプレ・アイヌ説だと思つたと指摘している。

前掲(3)三〇ページ。

なおモースは、以下の論文の中でプレ・アイヌ説を唱えた。

Morse, E.S. (1879) 'Trace of An Early Race in Japan' *The Popular Monthly* 14, pp. 257-266. 同論文は、E.S. モース、近

藤義郎・佐原真編訳 (一九八三) 『大森貝塚・付関連史料』 岩波書店 (岩波文庫) 一二七―一五三ページに翻訳されている。

- (9) 坪井正五郎 (一八八七) 「コロボツクル北海道に住みなるべし」 東京人類学会報告二―一二、九三―九七ページ。

- (10) 江戸時代の日本石器時代人アイヌ説に関しては、次の清野謙次の書物に詳しい。

前掲(3)一三―一七ページ。

なお、新井白石と近藤重藏の見解は、周知のように石鏃肅慎国説であり、厳密に言えばアイヌ説ではない。この点については、次の書物を参照のこと。

前掲(3)一七一―二〇六ページ。

- (11) この点が、明治時代においてコロボツクル説がほぼ坪井正五郎のみによって提唱されたことと異にする。当時アイヌ説は小シールトを筆頭とする外国人研究者の影響を受けて、神田孝平、山中笑、白井光太郎などによって主張された。この点に関しては次の書物において詳細に述べられている。

前掲(6)工藤雅樹 (一九七九) 八〇―一〇七ページ。

- (12) 例えば、小金井良精 (一八九〇) 「本邦貝塚ヨリ出ル人骨二就テ」 東京人類学雑誌六―五六、四一―四六ページ。

なお、この間の事情に関しては、次の拙論の中でも論じたことがある。

前掲(7)八五〇〜九〇ページ。

(13) かかる講演会の速記録が次の雑誌に掲載された。

小金井良精(一九〇三)「日本石器時代人の住民」東洋学芸雑誌二五九・二六〇、小金井良精(一九二六)『人類学研究』大岡山書店、二八九〜三六二ページ所収。

(14) 前掲(13)小金井良精(一九二六)三五八〜三五九ページ。

(15) 清野謙次によれば、アイヌ説の体質方面では小金井良精、民俗方面では鳥居龍藏であり、両名の主張の骨子は、それぞれ自ら多年にわたって収集した資料から結論づけたものであると論じている。

前掲(6)三〇ページ。

以上のように、鳥居龍藏は、恩師坪井正五郎が唱えるコロボツクル説に反することになるのであるが、以下の拙論の中でもやや詳しく指摘した如く、アイヌ説を完全に承認するものではなかった。かかる最大の理由は、コロボツクル説を提唱する恩師坪井正五郎の立場を証明ないし補強するものとして、明治三二(一八九九)年に北千島列島調査に出かけたからであると看做される。

前掲(7)八七〇〜九〇ページ。

(16) 前掲(3)五一ページ。

(17) なお本文中で論じたように、この時代においては、後世に日本列島に渡来したと想定される集団(この集団を日本人の祖先と看做す)が先住していたアイヌを駆逐したとされていた。かかる議論を先取りして述べると、その後次のような新展開となった。すなわち、日本石器時代人の研究などから、現在の日本人と石器時代人の関係が案外近いものであることが分かった。そのため昭和時代に入ると、かように想定された集団がアイヌを駆逐したのではなく、日本石器時代にも日本人の祖先につながる集団が存在し、この集団がアイヌとも混血して日本人が形成されたという有力な説が登場してきた。つまり、この説の特徴は日本人は混血の集団で、後世の渡来人ではないとする点である。

前掲(3)五七ページ。

(18) 前掲(3)五二〜五八ページ。

(19) 前掲(3)五五ページ。

(20) 前掲(3)五八ページ。

(21) なお、かかる清野謙次の立場は次の書物によって集大成された。

清野謙次(一九二五)『日本原人の研究』岡書院。

(22) この間の経緯に関しては、以下の拙論の中で論じた。

前掲(2)田畑久夫(二〇〇〇)三〜四ページ。

(23) 鳥居龍藏の畿内調査に関しては、以下の拙論において詳細に

論じたことがある。

田畑久夫（一九九二）「鳥居龍藏と大和―畿内調査を中心に―」
日本文化史研究一六、四〇―五八ページ。

(24) かかる点に関しても、恩師坪井正五郎と意見が対立した。つまり坪井正五郎は、畿内では石器時代が認められないと考えたのである。

(25) 前掲(2)田畑久夫（二〇〇〇）七―九ページ。

(26) かかる点について、工藤雅樹はその著書の中で、「鳥居がアイヌ説にふみきっていることが、誰人の眼にも明らかであろう」（二二二ページ）と述べていることから推察できる。

前掲(6)工藤雅樹（一九七九）。

(27) 鳥居龍藏（一九二五）『有史以前の日本』磯部甲陽堂、鳥居龍藏（一九七五）『鳥居龍藏全集 第一巻』朝日新聞社、一六七―四五三ページ所収。

(28) なお、鳥居龍藏は本文で言及したように、石器時代における先住民族としてアイヌの存在は認めるのであるが、これらアイヌの先住地に関しては、彼らが使用する土器の模様および意匠から、以下の著書の中で「朝鮮・満州・蒙古等日本に近接した大陸の物よりも、むしろニューギニーの物に似て居る」ということを述べて置くだけに止める」（三八四ページ）と論じ、アイヌ南方起源説を採用している。そしてさらに同書では、南方起源のアイヌが石器時代に日本列島に居住するなかで、「その風

俗は北方化されて居るといおうか、又北方のプリミチブカルチュアを採用したものであるといおうか」（三八五ページ）と述べ、アイヌは現在みられるように、北方の諸民族集団の風俗・習慣を身に付けたと考えたのであった。

前掲(27)三八一―三九〇ページ。

(29) 前掲(27)三八六ページ。

(30) 周知のように、鳥居龍藏が主として活躍した第二次世界大戦以前の日本においては、人類の集団を皮膚と中心とする生物学的規準によって白人、黒人、黄色人と分類する人種と、使用している言語を主体とする区分であるアラブ民族、スラブ民族などの民族との厳格な区分がなされてこなかった。それ故、現在では例えば、日本民族というように、民族名称で表現する場合でも、日本人種あるいは日本人と称されることが度々みられた。

なお現在では、下記の書物に代表されるように、民族や人種という概念自体が曖昧であるという議論もあり、厳密には民族・人種という概念は存在しないとする見解が有力となりつつある。スチュアート・ヘンリ編（二〇〇二）『民族幻想論 あいまいな民族 つくられた人種』解放出版社など。

(31) 前掲(2)田畑久夫（二〇〇〇）九―一〇ページ。

(32) 前掲(27)三八七ページ。

このように、鳥居龍藏は「固有日本人」の主要部分が、蒙古（モンゴル）・満州（中国東北地方）から朝鮮半島を経由した北

方民族の一集団と想定していた。この事實は、鳥居龍藏が「固有日本人」の特徴について、人種解剖上、頭の形が広い長頭で、眼の形が蒙古眼つまり眼尻が上がった三ヶ月型の一重瞼をしていると述べていることから想像がつく。

前掲(27)三八八ページ。

(33) 以下マレー人種に関しては、次の書物を参考にした。

前掲(27)三八八～三八九ページおよび四一〇～四二四ページ。
なお、マレー人種という用語を最初に使用したのは、ブルメンバッハ (J. Blumenbach) である。ブルメンバッハははじめ世界の人種をカウカシア (コーカサス) 人種 (白人)、モンゴリア (蒙古) 人種 (黄色人)、エチオピア人種 (黒人)、アメリカ人種の四種類に区分したが、その後キャプテン・クック (James Cook) などの南太平洋航海の成果を踏まえて、マレー人種を付け加えた。

前掲(27)四一四ページ。

(34) 主要民族としては、ボルネオ島に居住するダヤーク族、スマトラ島に分布するバタック族、セレベス島を拠点とするアルフロ族などがあげられる。

(35) 前掲(27)三八八ページ。

なお鳥居龍藏は同ページにおいて、日本の古代史に登場する隼人の風習はかかるインドネシアンのそれに類似していると述べている。

(36) この点に関して、フランスの人類学者などによるとかつて日本列島にネグリート族が居住していたという説も存在する。しかしながら鳥居龍藏は、そのような証拠が存在しないとしかかる説に関しては否定的である。

前掲(27)三八八～三八九ページ。

(37) 台湾の先住民は、第二次世界大戦以前においては、同一集団においても生蕃と熟蕃に区別されることが多かった。生蕃とは、自らのアイデンティティを擁護するために、後からやって来た漢族や植民地とした日本人に対して教化されることを拒否し、反抗した人々をいう。これに対して熟蕃とは、先住民の中でも積極的に漢族や日本人の風習や文化を導入しようとする人々、つまり教化された集団を称した。

(38) 前掲(27)三八九ページ。

(39) 前掲(27)三八八ページ。

(40) ユーラシア大陸の東南端とオーストラリア大陸との間に散在する大スンダ列島、小スンダ列島、スラウエシ島、ルソン島などの多数の島からなる諸島で、豪亜地中海を形成する。別名は東インド諸島である。なお旧称はマレーシア諸島。

(41) 前掲(27)三八八ページ。

(42) かかる鳥居龍藏の推定は、大変興味深いことに、柳田國男の最後の著作とされる左記の著述の中で論じた、日本人の祖先のルートと一致している。

柳田國男(一九六一)『海上の道』筑摩書房、柳田國男(一九七八)『定本柳田國男集 第一卷』筑摩書房、一〇二五ページ所収。

(43) インドシナ民族に関しては、鳥居龍藏の以下の書物を参照した。

前掲(27)三八九～三九〇ページおよび四一七～四二〇ページ。

(44) 前掲(27)三八九ページ。

(45) 北方の項が中流域を發祥地とする漢民族が、南中国に進出したのは、遊牧民の侵略から逃れるためと、人口増加に伴う食糧不足を解決するためであると考えられる。

(46) かように、鳥居龍藏がミャオ族に関心を有するのは、明治三五(一九〇二)年七月から翌三六年三月まで現在のミャオ族の居住の拠点である西南中国調査を実施したからであると思われる。その調査に関しては詳細な報告書および調査記録が出版されている。

鳥居龍藏(一九〇七)『苗族調査報告書』東京帝国大学人類学教室刊、鳥居龍藏(一九七六・A)『鳥居龍藏全集 第一一巻』朝日新聞社、一〇二八〇ページ所収。

鳥居龍藏(一九二六)『人類学上より見たる西南支那』富山房、鳥居龍藏(一九七六・B)『鳥居龍藏全集 第一〇巻』朝日新聞社、二一八～五二二ページ所収。

また、鳥居龍藏のミャオ族を中心とした西南中国調査に関し

ては、以下の拙著の中で論じたことがある。

田畑久夫(一九九七)『民族学者 鳥居龍藏—アジア調査の軌跡—』古今書院、五七～八二ページ。

なお、ミャオ族に関しては、当時インドシナ民族つまりインド・シナ語系統に属するのでなく、オウストロアジア語族に所属するモン・クメール語系の一分派であるとする、以下の著作の中で展開したデーヴィス少佐(Major H.R. Davis)の説が有力とされていた。

Davis, H.R. (1909) "Yün-Nan, the link between India and the Yangtze" Cambridge at the University Press.

田畑久夫・金丸良子編訳(一九八九)『雲南—インドと揚子江流域の環—』古今書院、四四〇～四四九ページ。

(47) 前掲(27)三九〇ページ。

(48) 前掲(27)四七〇ページ。

(49) ミャオ族は、鳥居龍藏が指摘するのとは違って、銅鼓を所有していない。管見では、鳥居龍藏のいうインドネシア民族の中で、銅鼓を確実に所有しているのは、ヤオ族の一分派集団である白禪ヤオ族とスイ族である。

(50) 前掲(46)鳥居龍藏(一九二六)、鳥居龍藏(一九七六・B)二三一ページ。

(51) 鳥居龍藏が本文で言及したラクーペリー説に大變興味を示し、賛同するのは、従来台湾の先住民族はインドネシアンであって、

マレー系の集団であるとされてきた。ところが、ラクーベリー説のように、先住民族の一部であるタイヤル族がミャオ族の一部と同族であるとすれば、インドシナ民族に属する集団も台湾に居住することになるのである。

(52) 前掲(46)鳥居龍藏(一九〇七)、鳥居龍藏(一九七六・A)

一〇二八〇ページ所収。

(53) 前掲(46)鳥居龍藏(一九二六)、鳥居龍藏(一九七六・B)

二一九〇五二一ページ所収。

なお鳥居龍藏は、当時としてはわが国で最初に本格的な海外におけるフィールドサーヴェイを実施した。しかし、その調査費用に一部を捻出するという目的もあって、外国人の海外でのフィールドサーヴェイを見習って、その成果を正式の学術上の論文や調査報告書として刊行するとともに、一般読者を対象としたその調査を試みた地方や地域の旅行記を合わせて出版することを慣行としていた。かように、旅行記類を出版したのは鳥居龍藏自身によれば、

然るに日本の学者の発表するのは、惜しいかな少数のもののみに見せる的のむつかしい頗る面白くない、石をかむような堅い報告調査だけであって、その山河の景況如何、其処に住む人間の風俗・習慣如何、自然と人文との関係如何等に至っては一向書いたものがない。

……(中略)……

余が本書の記述はすなわち「旅行日記」に属するのであって、余の後に発表せんとする論文・報告とは別なものである。すなわちこれは研究調査当時における毎日記述した飾らざる偽らざる、素直な日記文である。そしてまず余はその土地をいかに旅行したか、その土地の山・川・人情・風俗と我らの交渉は如何というものを主にして、これを書いたものである。余はこれがために日々の学術研究をすると共に、日記の記述を怠らなかつた。(五一七〇五二八ページ)

という状況を克服しようとしたからであるとしている。
(54) ミャオ族は、ほぼ同地域に分布・居住するヤオ族とともに、伝統的には移動生活を行なってきた。伝説上のミャオ族の故郷は『史記』五帝本紀に記載されている現在の江西省から湖南省にかけての地域に比定されている「三苗」の地とされているが、確定していない。とくに、ヤオ族と異なり、ミャオ族は固有の文字を所有しなかつたので、その歴史に関しては不明な部分が多い。

鈴木正宗・金丸良子(一九八五)『西南中国の少数民族 貴州省苗族民俗誌』古今書院、一三〇一四ページ。

田畑久夫他(二〇〇一)『中国少数民族事典』東京堂出版、一六二〇一七七ページ。

なお、現在においてはミャオ族のすべての分派集団が移動しておらず、現在でも移動しているのは自称「モン」(mong)

と称している分派集団のみである。この集団はベトナムのドンバン高原をはじめとする山岳地帯にも居住しており、当地では「モン」(Hmông)と呼ばれている。生活の中心は農業で、トウモロコシを山腹斜面に栽培しているが、一部には伝統的な焼畑農業に従事し、さらに移動することを考えているものや、現在ほとんど消滅してしまっているが、この集団の伝統的な生業の一つである木地業に従事するものも存在する。

田畑久夫(二〇〇一)「杓子屋から木地屋へ―ベトナムでの事例―」学苑(昭和女子大学)七三六、田畑久夫(二〇〇二)『木地屋集落 系譜と変遷』古今書院、二八五―二九八ページ所収。

(55) 貴州省北東端の遵義地区などには唐代において既に漢民族が進出していた。しかし、貴州省の大半の地域は、明王朝時代(一三六五―一六四四年)から清王朝時代(一六四四―一九一一年)にかけて、漢民族が屯田兵という形式で進出してきた。そのため、ミャオ族は例えば、一四四九年に大蜂起を起こすなど、何回となく漢民族に対して反抗を試みた。しかし、これらの反抗はすべて失敗してしまった。そのようなこともあり、現在でもミャオ族は漢民族に対する反発が強く、周辺に居住する他の少数民族以上に、自らのアイデンティティを残そうとする傾向がみられる。

前掲(54)田畑久夫他(二〇〇一)二四ページ。

(56) つまり、西南中国調査を実施した明治三五(一九〇二)年当時は、中国において近代化つまり漢化が進展しておらず、伝統的な風俗・習慣が強固に残っていたと推察できる。このような状況は貴州省のミャオ族居住地帯に関しては、大型車両の通行可能な道路が建設されるようになった一九八〇年代半ばごろまで続いていた。しかしその後は、日常生活においても民族衣裳を常用していたのが漢民族風に変化したように、急速な漢化現象がみられるようになった。その結果、かなりの奥地に出かけても、ミャオ族の伝統的な風俗や習慣が消滅している。

(57) 前掲(46)鳥居龍藏(一九二六)、鳥居龍藏(一九七六・B)四三二ページ。

(58) 現在ではミャオ族は、言語系統上では大きく三つの分派集団、すなわち自称「コ・シヨン」(qo³⁵εo³⁵)と称する湘西方言集団、自称「ムー」(Mhu³⁵)という黔東方言集団、自称「モン」(Mo⁴⁹)を主張する川黔滇方言集団の三分派に分けられる。しかし、現在でも女性が日常的に着用するスカートの色を基準とした伝統的な分類方法で呼ぶことが多い。鳥居龍藏もこの分類方法を踏襲して、ミャオ族を「紅苗」(Hong Miao)族、「青苗」(Tsing Miao)族、「白苗」(Peb Miao)族、「黒苗」(Heh Miao)族、「花苗」(Hwa Miao)族の五種類に区分している。

国家民族委員会民族問題五種叢書編輯委員会(編)(一九八

一)『中国少数民族』人民出版社、四四六ページ。

前掲(46)鳥居龍藏(一九〇七)、鳥居龍藏(一九七六・A) 四四ページ。

(59) 前掲(46)鳥居龍藏(一九二六)、鳥居龍藏(一九七六・B) 四三三ページ。

(60) 前掲(46)鳥居龍藏(一九二六)、鳥居龍藏(一九七六・B) 四三三～四三四ページ。

(61) ミャオ族の体質や言語に関する専門的な記述は次の書物にみられる。

前掲(46)鳥居龍藏(一九〇七)、鳥居龍藏(一九七六・A) 四六～一〇一ページ。

以下のミャオ族に関する記述は下記を要約したものである。

前掲(46)鳥居龍藏(一九二六)、鳥居龍藏(一九七六・B) 四三四～四三五ページ。

(62) 銅鐸に関しては以下の論文を参照した。

鳥居龍藏(一九一三)「銅鐸考」歴史地理三二一、前掲(46) 鳥居龍藏(一九二六)、鳥居龍藏(一九七六・B) 五七五～五七八ページ所収。

鳥居龍藏(一九二三)「我が国の銅鐸は何民族の残した物か」人類学雑誌三八―四、前掲(46)鳥居龍藏(一九二六)、鳥居龍藏(一九七六・B) 二六五～二七七ページ所収。

(63) Heger, F. (1902) 'Alte Metalltrommeln aus Südost-Asien'

Leipzig

筆者は同論文を未見であるが、この論文は二分冊で合計二四五ページもある大論文であるという。その章立ては、

I. Einleitung.

II. Aufzählung der bisher bekannten Trommeln.

III. Einteilung in Typen.

IV. Geographische Verberitung.

V. Beschreibung des Materiales.

VI. Vergleichende Betrachtungen.

VII. Herkunft und Bedeutung der Trommeln.

VIII. Literatur.

である。

前掲(46)鳥居龍藏(一九〇七)、鳥居龍藏(一九七六・A) 一八〇ページ。

(64) この銅鼓に関しては、形状、紋様、把手、化学的分析、音色的価値などについて詳細な分析と考察を行なっている。

前掲(46)鳥居龍藏(一九〇七)、鳥居龍藏(一九七六・A) 一八八～一九七ページ。

しかし、本論文の註(49)でも言及したように、現在ミャオ族が銅鼓を確実に所有しているという事例は存在しない。鳥居龍藏が発見した銅鼓はミャオ族居住地帯であるが正確な出土地名が明らかでない。

前掲(46)鳥居龍藏(一九〇七)、鳥居龍藏(一九七六・A)一八八ページ。

また鳥居龍藏は、種々の漢籍史料の記述からミャオ族が銅鼓を所有していると論じている。しかしながら、かかる漢籍史料に記述されているのは当時独家(Tchongkia)と称された集団である。独家は現在ではミャオ族の分派ではなく、プイ族と推定されている別の民族集団である。

前掲(46)鳥居龍藏(一九〇七)、鳥居龍藏(一九七六・A)一八一―一八八ページ。

とはいうものの、南中国のミャオ族が集中して分布・居住する地域から出土したことは、大いに注目すべきことといえよう。

- (65) 同様のことは、前稿の諏訪地方にみられる黒曜石の出土に関して言及したように、鳥居龍藏は疑問が生じれば、書物など活字の力を借りてその疑問点を解決するというよりも、むしろできうれば現地に出かけ、そこで実際に実物を観察してから疑問点を解決するという現場中心主義の手法を採用した。かかる鳥居龍藏の研究態度を、筆者は実証主義的な研究態度と名付けた。
- 田畑久夫(二〇〇二)「鳥居龍藏と信濃調査(中)」日本民族起源論との関連を中心に―昭和女子大学文化史研究六、一〇―一一ページ。

前掲(53)田畑久夫(一九九七)四三―八二ページ。

- (66) 佐藤亀一(一九一八)「尾張国熱田の貝塚より得たる日本石

器時代人骨に就て」人類雜誌三三―一一、一六―三〇ページ。

- (67) 池田次郎・大野晋編(一九七三)『論集 日本文化の起源 第五卷日本人種論・言語学』平凡社、八ページ。

(68) その契機となったのは、大正六(一九一七)年に京都帝国大学濱田耕作(青陵)教授の指導の下に実施された、大阪府南河内郡道明寺村(原、藤井寺市)国府遺跡の発掘調査であった。なおこの発掘調査には鳥居龍藏や小金井良精も参加している。

濱田耕作(一九一八)「河内国国府石器時代遺跡発掘報告」、京都大学文学部考古学教室編(一九七六・A)『京都帝国大学文学部 考古学研究報告第二冊 河内国府石器時代遺跡発掘報告等』臨川書店、一―四八ページ所収。

濱田耕作・辰馬悦藏(一九一九)「河内国府石器時代遺跡第二回発掘報告」、京都大学文学部考古学教室編(一九七六・B)『京都帝国大学文学部 考古学研究報告第四冊 河内国府石器時代遺跡第二回発掘報告等』臨川書店、一―三四ページ所収。

前掲(6)工藤雅樹(一九七九)二二五―二二六ページ。

- (69) 例えば清野謙次・宮本博人(一九二六・A)「津雲貝塚石器時代人はアイヌなりや」考古学雑誌一六―八、一八―四一ページ。

清野謙次・宮本博人(一九二六・B)「再び津雲貝塚石器時代人のアイヌ人に非らざる理由を論ず」考古学雑誌、一六―九、一四―二八ページ。

なお清野謙次の人種論に関しては、自身の執筆による回顧録が存在する。

前掲(3)九一―一七〇ページ。

(70) 清野謙次が使用した型差平均というポニアトフスキーの統計学的方法是、近代統計学の批判に耐えられないものであるという。しかし、かかる統計的な処理には込み入った複雑な計算が必要であつた。そのため、当時の多くの人類学研究者は度肝を抜かれ、驚嘆の眼でみられたという。

前掲(6)寺田和夫(一九七五)二〇二ページ。

(71) 清野謙次の主張する石器時代人の人種(民族)的な位置づけに関しては、次のような見解もみられる。すなわち、今村豊らによれば、資料として用いた考古学的編年に関する欠陥および古人骨の集団比較の方法が不適当であるとし、清野謙次が使用したものと同じ資料を使い正当と看做される分析・検討を行なった結果、異なつた結論が得られるという。その結論とは、清野謙次が唱えるように、現代日本人と石器時代人とは類似点がありみられないとしたアイヌが、現代日本人と石器時代人の中間型を示すという事実である。つまり、清野謙次が石器時代にみられるアイヌの特徴を軽視しすぎているという指摘である。

今村豊・池田次郎(一九五〇)「清野博士の日本人種論に関する疑義」民族学研究一四―四、一三一―一四二ページ。

(72) 前掲(67)一一一ページ。

(73) 前掲(6)工藤雅樹(一九七九)二四七ページ。

(74) 前掲(68)京都大学文学部考古学教室編(一九七六・B)三二ページ。

(75) かかる濱田耕作の新しい学説は、正確には日本石器時代には、縄文式土器を使用した民族と弥生式土器を使用した民族の二大系統が存在し、前者はアイヌ、後者は隼人族がそれぞれ中心となつて形成されたとする喜田貞吉の学説に反論する形式で提出された。なお、喜田貞吉の立場は、以下の論文に詳しい。

喜田貞吉(一九三八)「日本民族の構成」、『日本文化史大系 第一巻』所収。喜田貞吉(一九七九)『喜田貞吉著作集 第八卷 民族史の研究』平凡社、五二―七六ページ、とくに六〇―六一ページ。

(76) 金関丈夫(一九五九)「弥生時代の日本人」第一五回日本医学会総会学術集会編『日本の民族―一九五九年』(第一巻)、前掲(67)二二九―二七二ページ所収。

(77) 前掲(6)工藤雅樹(一九七九)三〇一ページ。

(78) 長谷部言人(一九四〇)「太古の日本人」人類学雑誌五五―一、三二―三三ページ。

(79) しかし、長谷部言人は断言こそしなかったが、大正五(一九一六)年ごろから、石器時代人は日本人であろうという意見を有していた。

前掲(78)三三三ページ。

- (80) 長谷部言人(一九四二)「備中羽鳥貝塚人骨」人類学雑誌五六一二、一三三三ページ、とくに三三二ページ。
- (81) 前掲(80)三三三ページ。
- (82) 前掲(67)一三三ページ。
- (83) 長谷部言人(一九四八)「人類の進化と日本人の顕現」民族学研究一三—三、二〇二ページ。
- (84) 前掲(83)二〇五ページ。
- (85) 鈴木尚の立場は、日本人の小進化あるいは小進化的変化と称されるものであるが、以下の書物に詳しく述べられている。
- 鈴木尚(一九六三)『日本人の骨』岩波書店(岩波新書)
- (86) 前掲(2)田畑久夫(二〇〇二)二ページ。
- (87) そのため、徳島県鳴門市の妙見山山頂にある徳島県立鳥居龍藏記念館の玄関近くに鳥居龍藏が発掘したドルメンが移築されている。
- (88) これらの日本列島周辺地域での鳥居龍藏の発掘調査を主体とするフィールドサーヴェイに関しては、以下の拙著、拙論において分析・検討したことがある。
- 前掲(46)田畑久夫(一九九七)一一一—一九四ページ。
- 田畑久夫(一九九八・B)「鳥居龍藏の朝鮮半島調査—調査記録などの分析を通して—」昭和女子大学文化史研究二、三三—六二ページ。
- (89) 田畑久夫(二〇〇〇)「鳥居龍藏と日向—フィールドサーヴェイの分析を通して—」昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要九、四三—六五ページ。
- (90) 前掲(65)田畑久夫(二〇〇二)四—二八ページ。
- (91) この点は、時代が下るに従って、より高度な科学的分析手法がドイツを筆頭とする欧米諸国から導入されたことによると推察できる。しかし、本稿でも論じたように、後世からみれば清野謙次が使用した統計学的処理の如く、当時としては最新の科学的手法であると思われる分析手法それ自体が、現在ではその批判に耐えられない学問的水準のものであった。
- (92) 植原和郎編(一九八六)『日本人の起源』小学館(小学館創造選書)二四—二五ページ。
- (93) 前掲(1)。
- つまり、日本人は東南アジア系と北アジア系の集団が日本列島の中で長い年月において混在し、現在でもそれらの混血がなお進行しているという特徴がみられる。そして、そのもつとも簡単なモデルとして在来系(東南アジア系)と渡来系(北アジア系)の二集団の「二重構造」が推定できるという(同書一八二ページ)。
- (94) かかる点を具体的に述べると次のようになる。すなわち、シベリア、中国東北地方などの北東アジアの寒冷な地方に居住していた集団が、朝鮮半島経由で日本列島に伝来してきた。そして、この集団が日本民族の形成に当たっては中心的な役割を担っ

たという立場である。鳥居龍藏は、「固有日本人」は日本神話に登場する天孫種（民）族の一派国津神系の集団に該当すると考えて、この系統の集団が朝鮮半島を経て日本列島に伝来したと推定していた。

このような鳥居龍藏の見解は、鳥居龍藏と同じ年度に発展した同郷の喜田貞吉の日本民族の祖先に関する論攷においてもほぼ同内容であった。喜田貞吉は、同論攷の結論部分において「結局われわれ日本人は、その本はどうでありまして、今はことごとく天孫種族の接木によって、その接木の結果として皆天孫種族になっておるものであります」（同論攷二九ページ）と論じている。

鳥居龍藏（一九一六）「古代の日本民族移住発展の経路」歴史地理二八―五、前掲（27）五〇四―五〇六ページ所収、とくに五〇五ページ。

喜田貞吉（一九一六）「日本太古の民族について」史学雑誌二七―三、前掲（75）喜田貞吉（一九七六）五―三〇ページ所収。

（95）かかる立場は、一九四八年に民族学を専攻とする石田英一郎の司会のもとに行なわれた座談会の席上で発表された。なお座談会には石田英一郎、江上波夫（東洋史学専攻）の他に、民族学専攻の岡正雄と鳥居龍藏の下に学んだ考古学専攻の八幡一郎であった。その後、その座談会の内容は次の雑誌に掲載された。

岡正雄・八幡一郎・江上波夫（一九四九）「日本民族・文化

の源流と日本国家の形成―対談と討論―」民族学研究一三―三。なお、同論文は一部修正加筆され、単行本として出版された。著者代表岡正雄（一九五八）『日本民族の起源 対談と討論』平凡社。

（96）江上波夫（一九六七、改版一九九二）『騎馬民族国家』中央公論社（中公新書）。

（97）なお池田次郎によれば、江上波夫が日本民族の起源において問題としているのは、日本文化の担い手としての日本民族形成論である。つまり、この江上波夫の立場と生物学的概念である人種を主体とする日本人種論とは一線を画く必要があるという。その理由としては、人種概念は身体的な特性が一義的に重視されるのは当然であるが、人種の生成や変化に関しては生物学上の領域だけでは理解できない問題があるからである。

前掲（67）二二ページ。

〔付記〕

本稿作成にあたり、貴重な論文などを拝借させていただいた本学人間文化学部歴史文化学科山本暉久教授および菊池誠一助教授に対して、とくに感謝したい。